

8 / 9 『キリストの平和を』（イザヤ2：1～5）

長谷川望牧師

- * 預言者イザヤが活躍した紀元前 8 世紀。イスラエル北王国は滅亡、南ユダ王国も戦乱の中で国土は荒れ果て、人々はアッシリアの支配の中で絶望の中にいた。かつてイスラエルの民の魂の拠り所であった神殿があったエルサレムも惨めな姿であった。このような時イザヤは民に告げる。「多くの民が来て言う。(中略)シオンから御教えが出、エルサレムから主のことばで出るからだ。」(イザヤ2：3) 敵に対する復讐の預言ではなく、希望の預言である。
 - * 「主は国々の間をさばき、多くの国々のために判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直し、国は国に向かって剣をあげず、二度と戦いのことを習わない。」(イザヤ2：4) 国連本部の前の公園の石碑に刻まれているこのことばは、武器には武器を持ってではなく、お互い武器を捨てて、争いを避け、信頼と尊敬の念をもってあらゆる民族が平和に暮らすことを求めている神のことばである。日本では戦時中「金属回収令」が出て、お寺や教会の鐘や鉄や銅などの金属を差し出さざるをえなかった。鋤や鎌を剣や槍にするという、まさにこのみことばと正反対のことが行われた。また、1942年の日本基督教団総会で信徒から集めた資金を元手に軍用機を治める「飛行機奉獻運動」をすることを決議し、4機を国に治めたことが記録されている。殆どの教会や牧師はこれに従わざるを得なかったが、集めたお金を密かに中国の戦争被害者のために送った牧師がいたことは励まされることである。
 - * 戦後、二度と戦争をしたくない、戦争はしないと堅い決議の基に日本国憲法が制定された。9条は戦争放棄を謳っているが、1946年7月の憲法改正委員会で、当時文部大臣であった田中耕太郎氏は戦争放棄の理由を述べている。「剣を以って立つ者は剣にて滅ぶという原則を根本的に認めるということ、不正義の戦争を仕掛けてきた場合、これに対して抵抗しないで不正義を許すのか、という問いには、不正義は長く続くものではない。」世界に稀なこの真の平和憲法に私たちは誇りを持つべきである。
 - * イザヤ11：6～9には、エルサレムが再建された時の様子が描かれている。あらゆる動物が、また人間が平和に、愛し合い、いたわり合う。このような世界がやがて「終わりの日」に必ず実現すると神は約束されている。私たちは、ただ黙ってその日を待つのではなく、エルサレムを建てるべく、日々努力して、一旦を担うべきである。「来たれ。ヤコブの家よ。私たちも主の光に歩もう。」(イザヤ2：5)
- 主のみこころは戦いのない世界である。イエス・キリストは言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」(マタイ26：52)キリストの平和を目指そう。